

韓眞（一九三一年—一九九三年）は、ソ連時代に中央アジア・カザフスタンで、朝鮮語で創作活動を行ったコリヨ・サラム（高麗人）の代表的な劇作家であり小説家である。平壤で劇作家の韓泰泉の長男として生まれる。本名は韓大鎔。一九四八年、金日成総合大学の露文学科に入学。一九五〇年に朝鮮戦争に従軍、一九五二年、モスクワに留学し、全ソ国立映画大学に入学した。一九五七年に金日成個人崇拜の公開批判を支持し、北朝鮮への帰還を拒否して一九五八年、ソ連に亡命した。一九六三年、カザフ共和国のクズルオルダ市の共和国間共同新聞である『レーニン・キチ（レーニンの旗幟）』（一九三八年—一九九〇年。一九三七年までは『ソンボン（先鋒）』の名で発行されていた。一九九一年、『コリヨ・イルボ（高麗日報）』に改称）の記者を経て、一九六五年から朝鮮喜劇音楽劇場（現コリヨ劇場）で劇作家として、多数の小説や戯曲を著した。一九九一年六月十日から一九九一年九月三日まで『コリヨ・イル

ボ』主筆を務めた。一九九二年十月から胃がんで闘病し、一九九三年七月、亡くなった。

韓眞は北朝鮮で生まれ、朝鮮戦争に参加し、ソ連にも留学、そして政治亡命するという多様な経歴を持った人物としてソ連コリヨ・サラム社会に定着し、ソ連解体後はカザフスタンのコリヨ・サラム社会で生きた。ソ連時代、民族語を失ったコリヨ・サラム社会で、朝鮮語で文芸活動を続けてきた彼は、民族文化の空白を埋めてその保持に寄与した代表的な人物である。

今回、訳出した「恐怖(gongho)」(一九八九年)は『レーニン・キチ』に一九八九年五月二三日から五月三二日まで八回にわたり連載された短編で、同年、カザフ語に翻訳され、文芸誌『カザフ文学』に掲載された。一九九〇年には、本作を含む韓眞の朝鮮語短編集『今日の光(onyeong-gwang)』がカザフ共和国の首都アルマトウで出版された。

* * *

本作は、朝鮮師範大学の教員であったリ・パベルという実在の人物の体験を小説化した作品である。作者は主人公である李先生の視線を通して強制移住（後述）直後のコリヨ・サラムの「恐怖」を描こうとした。

リ・パベルは一八九六年に沿海州で生まれ、一九三七年、沿海州から中央アジアへの強制移

住を経験した。一九三四年、コリヨ・サラムの中で初めて教育学博士号を取得したり、パベルは一九三三年から極東朝鮮師範大学の副学長を務め、同大学がカザフ共和国のクズルオルダに移転された後は副学長、自然科学部長、化学科長を歴任した。

この作品が発表されたのは、ソ連の改革・開放と言論の自由化による諸民族の再生が活発に進められたペレストロイカ期である。ソ連邦の諸民族は彼らの言論機関を通じて自らの起源や歴史、言語、文化の復活に努めた。コリヨ・サラムも彼らの代表的な言論機関である『レーニン・キチ』を軸に民族再生を進めた。ペレストロイカ期の民族再生という観点において、コリヨ・サラムにとって最も重要なテーマの一つが、本作でも描かれる「一九三七年の強制移住」である。この出来事によりコリヨ・サラム民族エリートが犠牲になったが、正確な数は明らかにされていない。大多数のコリヨ・サラムは彼らの根拠地であった極東から中央アジアへ強制的に移住させられたのだ。彼らはソ連政府から指定された、限定的な集団居住地以外はいかなる移動も許されなかった。ソビエト公民としての権利や義務も一切行使できず、民族的に抑圧された曖昧な存在として民族文化の基盤を守るうとしたのである。

スターリンの死後、フルシチョフによるス

ターリン批判がなされて以降、コリヨ・サラムにも移動の自由が次第に与えられ、政治的にも権利が回復されたが、強制移住という歴史的事実は長いあいだ、ただ生存者の記憶の中にとどめられたままだった。しかし、ペレストロイカ期に至つてから、公的な場でも自由に言及することができるようになったのである。一九八八年、『レーニン・キチ』紙上に強制移住に関する記事が初めて掲載され、以後、関連記事は次第に増加した。コリヨ・サラムの歴史において最も重要なテーマである強制移住をモチーフにした朝鮮語小説の発表は、民族史の再認識のみならず、朝鮮語文学の最後の世代としての、民族語の保存のための使命感から始まったといえる。

* * *

「コリヨ・サラム」とは、旧ソ連地域に住んでいるディアスポラ・コリアンの自称である。朝鮮半島からロシア極東に移住し、スターリンにより強制移住させられ中央アジアに定着し、ソ連解体後独立した旧ソ連諸国の国籍を持っているコリアン・ディアスポラ全般を指す。コリヨ・サラムの「コリヨ」とは漢字で表記すると「高麗」であり、「サラム」は日本語に訳すなら「人」という意味である。コリヨ・サラムは、一八六三年、帝政ロシア時代における朝

鮮半島から沿海州への最初の移住、一九三七年、ソ連時代における中央アジアへの強制移住、一九五六年、スターリンの死後得られた自由な移住、一九九一年、ソ連解体後から現在まで行っている移住の過程で移住と定着を繰り返して、旧ソ連諸国の独立後は、それぞれの国で国民統合を経験しながら、多様なアイデンティティを持つに至り、現在もますます変容している。

コリヨ・サラムの歴史は、朝鮮人が朝鮮半島から移住した最初期の移住先である極東の沿海州から始まる。沿海州コリヨ・サラムの祖先は、朝鮮王朝の時代に移住し、一八六三年、ジシンへ（地新墟。ロシア極東沿海州のウスリー川岸の村の一つで、ロシアと北朝鮮の国境地域にある）に定着した朝鮮人であるとする説のほか諸説あり、また移住時期に関しても異論の余地があるものの、一八六〇年代初頭であるのは確かであるといえる。最初の移住は、朝鮮半島におけるよりも安定した生活基盤をもたらした。移住者が成功を収めたことは朝鮮でも広く知られるようになり、その後、移住が目立って増加した。一八六四年、沿海州へ移住した朝鮮人は既に六十世帯に達していたが、それが一八六八年には百六十五世帯、一八六九年には七百六十六世帯に増加し、一八八四年までには移住者の総数はおよそ五五〇〇人にのぼっていた。彼らの八パーセント以上は農業に従事していた。

朝鮮人が多数、沿海州へ移住してきたのは、当時、朝鮮が専制下にあり苛酷な政治体制が敷かれていたこと、なかでも北部で経済的に極めて困難な状況に置かれていたことが主な理由であった。一八六九年から翌七〇年にかけて発生した大規模な飢饉の結果、収穫の大部分が失われ深刻な飢餓が始まると、状況はさらに悪化した。朝鮮人農民は生きる術を求めて、沿海州の無人の土地を目指したのである。一九三七年に強制移住させられるまで、沿海州は彼らの生活や抗日運動の拠点であった。

一九三〇年代のカザフスタンはソ連時代の政治的流刑地の一つだった。強制移住は一九三七年秋に始まり、一九三八年春に完了した。移住の理由に関しては、極東で日本のスパイになる可能性があったことから政治的な犠牲にされたという主張が支配的であるが、中央アジアにおける労働力の空白を埋めるためという意見もある。一九三七年九月初め、極東を発ったコリヨ・サラムを乗せた列車がカザフスタンに初めて到着したのは九月末だった。コリヨ・サラムはカザフスタンとウズベキスタンのあちこちに再分散及び再配置された。沿海州で集住していた彼らを一気に移住させ、分散・配置したことで、コリヨ・サラムが夢見ていた、沿海州で自治州を形成するという願いは圧殺されたも同然だった。彼らが主に配置されたのは農村部だった。

当時、中央アジア地域は飢饉と伝染病で人口減少が深刻な状況だった。人口の空白地帯、特に農村人口の空白地帯へのコリヨ・サラムの投入は、中央アジアが直面していた労働力不足を補い、コリヨ・サラムの稲作と野菜栽培の技術を活用しようとしたものである。

それまで沿海州でコリヨ・サラムのコミュニティを主導していた『ソボン』（一九二三年—一九三七年）、朝鮮喜劇音楽劇場、および朝鮮師範大学の首脳部らは強制移住が始まる前に逮捕または処刑された。一方、処刑を免れ、持てる限りの朝鮮語の資料や仕事道具を携えてカザフスタンに送られた諸団体の関係者たちは、冬が始まり反射幕のような凍土が覆うクズルオルダに投げ出されたのだった。その地で彼らは、新聞、劇場、大学を作り直し、民族文化の命脈を受け継いでいこうとした。

一九三七年、この年は、高齢者や子供たちの死者が多かった。コリヨ・サラムの生存者の中で一九三七年前後の出生者が非常に珍しいのは、その痕跡とも言える。この時、彼らにパンを分け与えたカザフ人とウズベク人がいた。彼らの援助は、束の間ではあるがコリヨ・サラムの苦痛を和らげたりもした。

強制移住とその定着過程でコリヨ・サラムは政治的弾圧と差別を受けた。彼らは公式には「行政的移住民」に分類されたが、「特別移住民」

として扱われた。特別移住民は特定居住地域を離脱する自由がなく、無断で離脱した場合、処罰を受けた。コリヨ・サラムは公民証を回収され、その後の五年間、居住地が制限されるといふ印が押された身分証を携帯するようになり、居住移転の自由を剥奪され、居住地に決められた地域を離れることが禁じられた。公式には行政的移住民に分類されたコリヨ・サラムは、実際の特別移住民の待遇、すなわち社会的に危険な人物とされた者の扱いよりは多少ましな待遇を受けたに過ぎなかった。例えば、ソ連から強制移住直前に財産を売却できる機会が与えられ、押収された資産に対する補償を受けることができると言われたが、このような約束や補償は強制移住後ほとんど実現しなかった。また、コリヨ・サラムは名目上の行政的移住民としてもさまざまな面での権利を制限された。特に国境地域への移住が制限されたが、これは国境地域の国々を通じて日本人と接触できる可能性をソ連が憂慮したためである。また逃走を防止するため、鉄道から遠い場所に配置された。そして彼らを効率的に管理、監督するため、定着地のコリヨ・サラムは一〇〇〇世帯以下に制限された。ウズベキスタンのタシケントに移住したコリヨ・サラムの場合、配置された場所以外の所へ行く場合、二十四時間以内に追放令が発効された。また、随所に配置されたコリヨ・サラ

ムは秘密警察の厳しい統制下にいた。スターリンの死後、移動の自由が与えられるまで、彼らは集団的に制限された所に居住しなければならなかった。

また、ソ連はコリヨ・サラムの国家機関への就職を制限し、政治的進出にも門戸を閉ざした。コリヨ・サラムはソ連の軍人として服務することができず、コリヨ・サラムの子どもたちはモスクワやレニングラードなどの大都市の大学に入学することもできなかった。コリヨ・サラムが入学できる高等教育機関とは、師範大学または農業大学だけだった。彼らが出世できる最も高い社会的地位とは共産党委員会の指導者だったが、それも非常に珍しいケースであり、彼らとしては狭い道だった。彼らは中学校の教員や共同組合の責任者または支配人、書記となることで満足しなければならなかった。

一九三八年、ソ連は朝鮮語をソ連内の少数民族の言語から除外し、カザフスタンとウズベキスタンでの朝鮮語教育を禁止した。移住先で改めて開校した民族学校も、朝鮮語の代わりにロシア語で授業する、ソ連の一般学校に改編された。クズルオルダの朝鮮師範大学もロシア語で教育するようになった。これは事実上、民族教育の廃止を意味するものだった。朝鮮語を教えていた教師たちは、他の科目を指導するか、他の職場に移らなければならなかった。図書館

と大学に保管されていた朝鮮語の書籍は焼却または廃棄された。このような状況の中でコリヨ・サラムにできることは、ソ連公民として認められることであった。それは自分たちの後世がより良い環境のなかで生きていくためでもあった。そのためにはソ連主導のロシア化またはソビエト化に積極的に参加しなければならなかったし、それが彼らにできる最善だったのだろう。かくしてコリヨ・サラムの生活全般にロシア語がますます浸透し、彼らの母国語は次第に力を失い、彼らは民族文化の基盤を失いつつあった。

本作は李先生の逸話を通じて、スターリンによって一斉に強制的に移住させられ、公民としてのいかなる権利や義務も行使できなかった現実と、彼らを抑圧する体制の下で生きていかなければならなかった状況の中で、彼らが向き合わなければならなかった恐怖の一面を描いている。本作が発表されたペレストロイカ期になってから、強制移住に関する公的な言及が可能となり、同時期には、ソン・ラウレンティイの『三角形の面積』（一九八九年）、カン・アレクサンドルの『遊びの法』（一九九〇年）、キム・ギ Chol の『移住初年』（一九九〇年）など、強制移住の実情が文学作品を通じて紹介された。それだけでなく強制移住をテーマにした演劇『一九二七年度の通過列車』（ジョン・ウラジミール

ル作、一九九〇年）が上演され、各界各層で強制移住に関する歴史的な再考を促す世論が形成された。また、同時期にコリヨ・サラムの民族再生を通じてアイデンティティを再構築しようとする動きは、沿海州に自治州を形成しようという世論の興隆までもたらした。

ソ連の崩壊と十五の独立国の形成、それぞれの独立国の基幹民族中心の国民統合は、コリヨ・サラムに、居住国に残るか、より良い環境を求めて他国に移住するかを選択を促した。ソ連解体と新生独立国の成立により、ソ連時代から形成されてきたコリヨ・サラムに共通する特性およびエスニシティは分化している。「カザフスタン・コリヨ・サラム」、「ウズベキスタン・コリヨ・サラム」、「ロシア・コリヨ・サラム」などの新しい概念が形成され始め、ますます強くなっている。ソ連における一つのエスニック・グループとしてのアイデンティティは残っているものの、薄くなりつつある。民族文化の基盤の側面から見ると、ソ連時代に生まれ教育を受けたグループは、ロシア語を自分の母国語として認識しており、各独立国で生まれ、教育を受けたグループは各国の言語を自分の母国語として認識している。

このようにコリヨ・サラムの民族基盤の喪失はソ連時代にすでに始まり、彼らのアイデンティティも変化し、現在も変容し続けている。

現在のコリヨ・サラムは朝鮮語を書くことも読むこともできないが、本作をはじめ、ソ連が解体する前後の時期に朝鮮語で著された文学作品は、後の世代によってロシア語やカザフ語など多言語に翻訳され、それを通じてその命脈が受け継がれていると言える。孫子の世代まで守られることを願った李先生の朝鮮語に対する意志と念願は完全に叶わなかったかもしれないが、現在もさまざまな形で多様な地域で受け継がれていると言えるだろう。